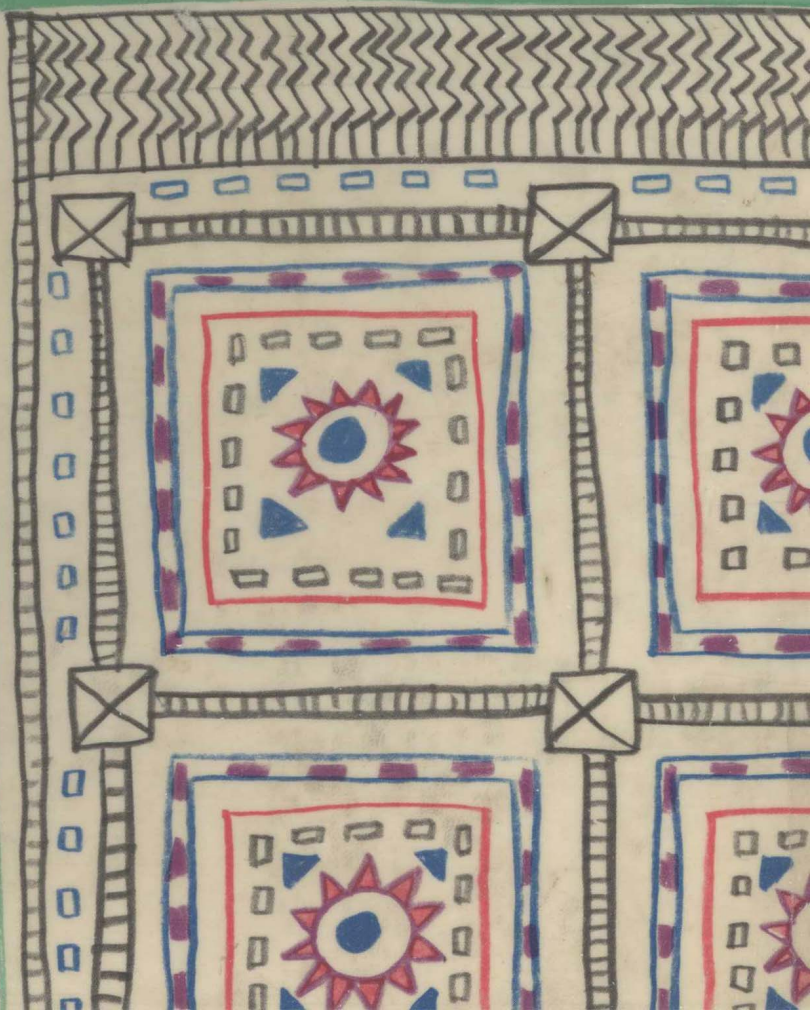
あぶ、あぶ

武田八洲満



あぶ

武田八洲満

東京文芸社

あぶ、あぶ
五五〇円

無検印
承認

0093—713701—5170

昭和四十六年五月一日印刷
昭和四十六年五月五日発行
著作者　武田八洲満
発行者　角谷奈良雄
発行所　株式会社東京文藝社
本社　東京都新宿区西大久保二ノ二六
出張所　東京都新宿区払方町一番地
振替・東京二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

あぶ、あぶ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

目次

あぶ、あぶ　五
すぎし去年　三
海に金色の帆　八
いろはにほへとかたきうち　一〇
しびりあん　じん　一四
雲の上の白い旗　二〇

装幀　風間　完

あぶ、あぶ

一

陸奥窪田藩旅人村惣百姓市原甚兵衛の二女、蝶が指名され、泣く泣くお涙屋敷へ奉公にあがったのは延宝五年の春である。

陸奥と言っても窪田は磐城の南にあり、積雪量もすくないのびやかで温暖な一帯である。蝶が僅かな荷物を抱え、案内とも監視ともつかぬ武士につきそわれて屋敷へ行く途中も、いちめん黄いろの菜の花が風にゆれていた。

窪田藩藩主、土方河内守雄次には四人の男子と一人の女子の子があった。雄信、雄隆、雄賀、助之

進と四人の男子は二年おきに誕生し、その頃には珍らしく妾腹はない。雄次の妻がきわめて勝ち気であり、嫉妬ぶかかったせいである。二万石の大名雄次は江戸と国許を正確に往復する振子のように歩きまわり、きちんと子どもを作っていた。妻の言いなりになっていたと言ってもいい。妻は背の高い、そばかすだらけの、どういうわけかいつも胸を張って歩く女であったという。

その妻が長子雄信をうとんじはじめるのは次子雄隆が二歳になった頃である。土方の下屋敷では妻の意見によって子を乳母にゆだねることがない。常に手もとにおいた。ある日突然のように妻が雄信を口ぎたなく罵り、打擲しはじめるのだ。おりよく国許から帰り、子のそばにいた夫の雄次も驚くほど激しい仕打ちであった。

妻は雄信を病気だときめつけるのである。特に大病をわずらったわけでもなく、風邪ひとつひかずに雄信は育っている。

「あの眼がいけませぬ、あれは病気のせい」

妻は言うが、雄次の見る限りでは、弟に愛情をとられた兄が母親を見る眼でしかない。雄次は口まで出かかったが、妻の眼のほうに恐怖を感じて黙ってしまった。ここで言えば三日は荒れるだろうと思ったからである。女中たちも怯えて次の間にさがっている。

雄次が、妻に駄目を押されるのはあくる日である。「あれをご覧ください」妻は眼を吊りあげ、唇を引きつらせながら、庭にいる雄信を指さす。

雄信は五寸四方ほどの穴を掘り、なにかを埋めようとしている。真剣な目つきであり、あきらかに

熱中していた。

雄次はできるだけ優しく、しかし父親らしい威厳も忘れずに自分の嫡子に尋ねた。なにを埋めようとしているのか、そのようなことは女中にやらせればいいのだが、もし興味が強いのであれば、私も手伝ってもいい、教えてほしい、雄次は言う。雄信は父親をちらとふりむいたが、自分で結末をつけるとしっかりした口調で答え「埋めているのは弟の死体です」と告げた。泥まみれの人形があった。

雄信さまご病気。藩内が一斉に言いたてるのはこれからのちである。雄次の妻は勝ち誇ったように一段と声を強め、二男雄隆を溺愛するようになる。雄信を弟のそばに近よらせぬよう、守り役の武士が五人に増員された。「おそろしいゆえ……」という理由で母親に近づくことも許されぬ毎日がはじまる。

父親も口をきかなくなった。雄信は軽蔑と恐怖の入りまじった眼を持つ家臣の中で暮すようになる。本当の病気になるのは八歳のときである。原因のわからぬ高熱が続き、一度は生命の危険を医者から告げられた。

雄信は涙をいっぱい溜め、父と母に会いたいとぜいぜい息を切らせながら訴えたが、守り役筆頭は最初の取次ぎを両親から拒否されると、あとは独断で雄信の訴えを伝えなかった。その必要はない、医者にも言う。

雄信を廃除し、二男雄隆に家督を嗣がせる旨の届が幕府に出されるのは大病を乗り切って雄信がうつろな目を天井に向けていたときである。家老の川合図書、阿部長蔵の二人が顔をそむけながら病室

に入り、「廃除に異議ございませぬか」と尋ね、返事のないのをたしかめるとそそくさと退出していた。「廃除とはなにか」と雄信が守り役に問うているとき、届を持った使者がもう大目付のところへ向っていた。嫡子となった雄隆は母の膝にまつわりつきながらしきりに砂糖をねだっていた。琉球からの黒い砂糖のかたまりが兄の存在さえ忘れがちなこの弟のなによりの好物であった。口のまわりが常にぬれていた。

雄信の口ぐせはこの頃から「私は病弱ですから」になる。一切の要求が拒否されるとわかった子どものあきらめだろう。たまには庭にお下りになってと医者がすすめるのに、弱々しく手をふって雄信は「病弱」を言う。「陽がこわいのです。なにしろ私は病弱なものですから」

すっかり信じこまされていた。

守り役は二人に減らされ、老女ひとりが痩せ細ったからだを拭き、着がえを手伝った。それまでは藩下屋敷にいたのが、屋敷そとの雑司ケ谷南蔵院にあずけられるようになる。母親がうっとうしいと洩らしたからである。父親が命じて南蔵院と交渉させ、二万石でも大名であるため、いやいやながらがはっきりわかる返事であったが、南蔵院は承諾と聞いたその日のうちに下屋敷から身柄が移されることになる。雄信はこの日以来、一度も藩の屋敷に戻らなかったし、両親に会うこともなかった。父親にはこの日、無理やりと言ったかたちで平伏させられ、声と、胸から下のからだを見た。「養生せよ」父親はぽつんと言う。弟たちが兄が屋敷を出たことさえ教えられない。兄の存在を忘れるように仕向けられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

南蔵院では「親切じゃのう」という言葉を覚える。涙もろくなるのも南蔵院からである。藩屋敷内では女中といえども藩主の妻におびえ、雄信の目すら見なかったが、寺の小坊主たちは遠慮なく声をかけ、うすうす経緯を知っていても知らぬふりで何くれとなく世話を焼いた。雄信が狂気とは見えなかった。

たまらなく嬉しかったに違いあるまい。すぐ鼻声になり「そちは親切じゃのう」と涙ぐむのだ。寺の築地塀ごしに見える藩下屋敷の森をぼんやり見ているときもあった。十八歳になっていた。この年、母が死んでいる。

雄信はもちろん葬儀に列席することも許されず、小坊主たちが見よう見まねの経を唱え、香をたくうしろに座って葬儀につらなる気分を味わったくらいであったが、屋敷内ではひと悶着がおこっていた。

家老ふたりが、藩主雄次に雄信の復権の可否を問うていたのである。

思い切った行為である。ことは不可能とわかっていた。無礼を言われ、手討ちもやむを得ない。しかし、それをあえてするくらい、二男雄隆の無能に藩内が気がつきはじめていたのである。

母親の溺愛を受けた雄隆はわがまま一方の反面、すこしの抵抗に合うとすぐおどおどと人の顔色をうかがう弱さを持っていた。どのようにすすめても学問を嫌い、小半刻の正座にも堪えかねて足を投げだしていた。武術は面籠手を見ただけで大の字になっていやだと駄々をこね、母親がとんでくるの

を待つありさまなのである。驚くべきことに雄隆は自分の姓名さえ満足に書けなかった。

すぐ下の弟雄賀は兄を一切無視し、僧侶になることを幼いときから宣言して一歩もゆずらず、一番下の助之進はもっとも激しく雄隆と衝突する攻撃力を持っていた。雄隆はかげでは助之進の意をうかがうことに汲々し、母親がかたわらにいるときだけ、助之進と対等のたたかいをした。

その母親が死んだのである。ただでさえ半人前と思われる雄隆の能力の、さらに半分が失われたと言っていい。

「ただ病弱のいわれであるならば……」家老の川合図書が同役の阿部長蔵に言う。「雄信さまのほうがどれほどわれわれとしてお仕えやすいかしれぬ。これは藩政をわれわれの手にうばおうなどという大それた考えからではない。お名前すらあやふやな雄隆さまをお守りして江戸城へ入る者の気持を申しているだけだ」

「異を唱えるつもりはござらぬ」阿部長蔵も頷く。「雄隆さま廃絶はすでにご長男雄信さま廃除のあとでもあり、大目付からの詮議もござろうが、雄信さま復権はご病気ご全快の言いわけも立つ。家臣一統の納得も得られようぞ」

しかし藩主雄次は渋面を作った。無礼は言わず、ため息ひとつついただけである。雄信全快の証拠があるかと言い、あれはまだ狂っとると言った。雄隆にも困っておる、しかし三百諸侯のうち自分の名を書けぬ者は幾らでもおる、と言い淀み、苦しそうに二、三の名をあげ、だがみな名君だと強く言った。雄隆とて母の死により、これからは良くなろう。

雄次はしかし自分の言葉に自信がなかったのか、あとで言葉をつけ加える。
「わしができるだけ長生きをして藩政を見よう。左様、七十歳まで生きれば、雄隆は四十歳になる。それでも名が書けぬと思うか」
二人の家老は切腹を申し出たが、慰留された。二人がいなければ七十歳までわしは生きられぬぞ、雄次は弱々しく笑い、ふっと遠くを見る目をしたからである。家老たちは顔を見合わせ、早々に退出した。強い妻の意志から抜けでることのできない弱い男のあわれを見たような気がしていた。
事実、雄次は七十歳まで生きた。そして、雄隆も本来の性格はかわらなかったが、どうやら一万八千石になっていた藩を引き嗣いだのである。それはのちの話になる。

雄信は南蔵院を出ることになる。陸奥窪田の領内旅人村に雄信のための小さな屋敷が作られ、一生をそこですごすよう、父から命じられていた。父親雄次は息子の存在を忘れたかったのではないか。家老たちがもう一度同じことを言い出すおそれを感じとっていたのかもしれない。雄信擁立を言い出されるのは、百姓一揆につぐ藩存立の重大問題であった。お家騒動で取り潰された藩は十指にあまる。雄信は土方家の恥部であり、ひと目に触れさせたくなかったのだ。
だが、父親や家老たちの思惑とはなんのかかわりもなく、雄信の生活は相変らずであった。病弱を口にし、親切じゃのうと涙ぐむ癖はなおっていない。南蔵院のときは小坊主たち相手にすこしばかり世の中に触れたが、藩領窪田に帰ってからはまた一切を隔絶された毎日に戻っていた。自分は芯の底

からの病人だと信じて疑わなくなっている。
大量に、はじめて夢精をした朝、雄信はおびえた顔で老女を呼び、これも病気のせいかと尋ねている。「それにしては……」雄信は顔をゆがめ「わしはけだものなのか……」と涙ぐんだという。老女はきわめて平静に、なに知らぬ顔で「仰せのとおりでございます、不潔ゆえ、病気のせいでございます」そう答えたようだ。雄信はおろおろとその日一日をすごしている。
お涙屋敷は正式な名称ではない。村の者は屋敷が誰の何のためにたてられたものか、一切教えられていない。村の惣百姓の家よりも狭く、棟も低かった。藩の仕事ではないと誰もが思っていた。藩の手であれば必ず言ってくる夫役がなかったし、年貢の増減も達示がなかった。
病人がいるらしい、それも殿様とかかわりがあるようだとわかるのは五年もすぎてからである。それまで人目につかぬように出入した警護のさむらいらしい人かげがなくなり、代りに村から手伝いの女を出すように言われ、二人がはじめて屋敷に入って、病人がいるとわかった。朝から晩まで病人は泣いていると話が伝わり、お涙屋敷の名は難なくきまった。それまでの老女が死んだことは誰も知らない。
殿さまがその年ちょうどご隠居になり、新らしく雄隆さまが叙任、土方山城守さまとなったことは、お祝い年貢をとられたことでわかっている。警護の武士がいなくなったのも同じ頃である。病人はどうやらそれとかかわりがあるらしかった。村と屋敷のあたらずさわらずの関係が長く続く。
蝶は手伝い奉公の五人目である。お涙屋敷ができてから十二年たっていた。屋敷は一部が朽ちて中

もかなり荒れていると教えられていた。病人はほとんど口をきかず、何人目かの手伝いが教えたという花莫蓙編みを続け、今では莫蓙の山ができているという噂であった。蝶はその人の身分を教えられていない。

月に一度、米や味噌を持った武士がどこからともなく現われ、病人の様子を一日観察し続け、挨拶なしに帰って行くことも判っていた。奉公の女はその武士によって屋敷へつれて行かれる。病人は廃人同様であるという。

蝶はその人を見た。お涙さまであった。

蒼白い顔に血筋を浮きあがらせ、歯を喰いしばりながら花莫蓙の杼を引いている。泥で洗い、うすく紅色をつけられた藺草が横に束ねられ、腕が無意識にそのほうにのばされては一本をつかみあげている。目は遠くのほうを見ていた。

蝶は歯をがちがち言わせながら辞儀をする。仕事は朝夕二度の食事の支度と洗濯だけである。考えただけで二年の期間に気が遠くなりそうであった。奉公を終った女がふさぎこみ勝ちになるという理由がわかった。

しかし、蝶は編み上った花莫蓙の美しさに驚嘆するのだ。屋敷の荒廃、病人のすすけた姿をおおい、埋めつくすように花模様は絢爛としていた。そこにだけ、世の中があった。

病人はいとおしむように莫蓙を撫で、くるみいつくしんでうしろに積み重ね、目を細めている。

蝶は「美しい」とはっきり言った。目がさめるようだ、いえ、心があったかくなりますと言った。

胸に手をあて、病人のうしろに立ってため息をついた。
「そちは親切じゃの」
やさしい声であった。蝶は慌ててそばを離れる。病人はすわりぐせのついた自分の席へ再びすわる。また、目が遠くを見る。

二

土方山城守雄隆は不機嫌であった。
藩主の地位についても、名ばかりであって、藩政は隠居の父親と家老ふたりがとりしきり、かたちだけの伺いさえもない。江戸と国許の往復の際、わずかに大名らしく地方役人の挨拶を受けるが、それもあきらかに実権のない男と知ってのそっけない挨拶であり、「下情に通じたい」と雄隆が言うのをまわりでは慌ててとめるのだ。「藩主として……」雄隆はかん高い声を出し、領地である九面港を知りたいと言ったのだが、あたりさわりのない言葉で巧みに返事がそらされた。藩主の無能を家臣たちは人目にさらしたくないのだろう。九面港には他藩の船も出入しているのだ。
国許の屋敷の毎日は退屈であり、入れかわり立ちかわりやってくる家臣たちの顔と名まえをおぼえるのも大儀だった。用事らしい用事は江戸詰の家老のところへ行くのだし、大事な決裁は父親がしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com